

枯野抄

芥川龍之介

青空文庫

文 艸、去来を召し、昨夜目のあはざるまま、ふと案じ入りて、吞舟に書か
 せたり、おのおの咏じたまへ

旅に病むで夢は枯野をかけめぐる

——花屋日記——

元禄七年十月十二日の午後である。一しきり赤々と朝焼けた空は、又昨日のやうに時雨
 れるかと、大阪商人の寝起の眼を、遠い瓦屋根の向うに誘つたが、幸葉をふるつた柳の
 梢を、煙らせる程の雨もなく、やがて曇りながらももうす明い、もの静な冬の昼になつた。
 立ちならんだ町家の間を、流れるともなく流れる川の水さへ、今日はぼんやりと光沢を消
 して、その水に浮く葱の屑も、気のせるか青い色が冷たくない。まして岸を行く往来の人
 々は、丸頭巾をかぶつたのも、革足袋をはいたのも、皆風の吹く世の中を忘れたやうに、
 うつそりとして歩いて行く。暖簾の色、車の行きかひ、人形芝居の遠い三味線の音——す
 べてがうす明い、もの静な冬の昼を、橋の擬宝珠に置く町の埃も、動かさない位、ひつ

そりと守つてゐる……

この時、御堂前南久太郎町、花屋仁左衛門の裏座敷では、当時俳諧の大宗匠と仰がれた芭蕉庵松尾桃青が、四方から集つて来た門下の人人に介抱されながら、五十一歳を一期として、「埋火のあたたまりの冷むるが如く、」静に息を引きとらうとしてゐた。時刻は凡そ、申の中刻にも近からうか。——隔ての襖をとり払つた、だだつ広い座敷の中には、枕頭に炷きさした香の煙が、一すぢ昇つて、天下の冬を庭さきに堰いた、新しい障子の色も、ここばかりは暗くかげりながら、身にしみるやうに冷々する。その障子の方を枕にして、寂然と横はつた芭蕉のまはりには、先、医者の木節が、夜具の下から手を入れて、間遠い脈を守りながら、浮かない眉をひそめてゐた。その後には居すくまつて、さつきから小声の称名を絶たないのは、今度伊賀から伴に立つて来た、老僕の治郎兵衛に違ひない。と思ふと又、木節の隣には、誰の眼にもそれと知れる、大兵肥満の晋子其角が、紬の角通しの懷を鷹揚にふくらませて、憲法小紋の肩をそば立てた、ものごしの凛々しい去来と一しよに、ぢつと師匠の容態を窺つてゐる。それから其角の後には、法師じみた丈艸が、手くびに菩提樹の珠数をかけて、端然と控へてゐたが、隣に座を占めた乙州の、絶えず鼻を嚙つてゐるのは、もうこみ上げて来る悲しさに、堪へられなく

なつたからであらう。その容子をぢろぢろ眺めながら、古法衣の袖をかきつくろつて、無愛想な頤をそらせてゐる、背の低い僧形は惟然坊で、これは色の浅黒い、剛愎さうな支考と肩をならべて、木節の向うに坐つてゐた。あとは唯、何人かの弟子たちが皆息もしないやうに静まり返つて、或は右、或は左と、師匠の床を囲みながら、限りない死別の名ごりを惜しんでゐる。が、その中でもたつた一人、座敷の隅に蹲つて、ぴつたり畳にひれ伏した儘、慟哭の声を洩してゐたのは、正秀ではないかと思はれる。しかしこれさへ、座敷の中のうすら寒い沈黙に抑へられて、枕頭の香のかすかな匂を、擾す程の声も立てない。

芭蕉はさつき、痰喘にかすれた声で、覚束ない遺言をした後は、半ば眼を見開いた儘、昏睡の状態にはいつたらしい。うす痘痕のある顔は、顴骨ばかり露に痩せ細つて、皺に囲まれた唇にも、とうに血の気はなくなつてしまつた。殊に傷しいのはその眼の色で、これはぼんやりした光を浮べながら、まるで屋根の向うにある、際限ない寒空でも望むやうに、徒に遠い所を見やつてゐる。「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる。」——事によるとこの時、このとりとめのない視線の中には、三四日前に彼自身が、その辞世の句に詠じた通り、茫々とした枯野の暮色が、一痕の月の光もなく、夢のやうに漂つてでもゐた

のかも知れない。

「水を。」

木節はやがてかう云つて、静に後にゐる治郎兵衛を顧みた。一碗の水と一本の羽根楊子とは、既にこの老僕が、用意して置いた所である。彼は二品をおぼおぼ主人の枕元へ押し並べると、思ひ出したやうに又、口を早めて、専念に称しょうみやう名なを唱へ始めた。治郎兵衛の素朴な、山家育ちの心には、芭蕉にせよ、誰にせよ、ひとしく彼岸ひがんに往生するのなら、ひとしく又、弥陀みだの慈悲にすぎるべき筈だと云ふ、堅い信念が根を張つてゐたからであらう。一方又木節は、「水を」と云つた刹那せつなの間、果して自分は医師として、万ばんぼう方を尽したうかと云ふ、何時いつもの疑惑に遭遇したが、すぐに又自ら励ますやうな心もちになつて、隣にゐた其角の方をふりむきながら、無言の儘まま、ちよいと相図をした。芭蕉の床を囲んでゐた一同の心に、愈いよいよと云ふ緊張した感じが咄嗟とつさに閃いたのはこの時である。が、その緊張した感じと前後して、一種の弛しくわん緩した感じが——云はば、来る可きものが遂に來たと云ふ、安心に似た心もちが、通りすぎた事も亦争はれない。唯、この安心に似た心もちは、誰もその意識の存在を肯定しようとはしなかつた程、微妙な性質のものであつたからか、現にここにゐる一同の中では、最も現実的な其角でさへ、折から顔を見合せた木節と、際

多く相手の眼の中に、同じ心もちを読み合つた時は、流石さすがにぎよつとせずにはゐられなかつたのであらう。彼は慌あわただしく視線を側そへ外そらせると、さり気なく羽根楊子をとりあげて、「では、御先へ」と、隣の去来に挨拶した。さうしてその羽根楊子へ湯呑の水をひたしながら、厚い膝をにじらせて、そつと今は師匠の顔をのぞきこんだ。実を云ふと彼は、かうなるまでに、師匠と今こんじやう生の別を上げると云ふ事は、さぞ悲しいものであらう位な、予測めいた考もなかつた訳ではない。が、かうして愈いよいよ末期の水をとつて見ると、自分の實際の心もちは全然その芝居めいた予測を裏切つて、如何にも冷淡に澄みわたつてゐるのみならず、更に其角が意外だつた事には、文字通り骨と皮ばかりに痩せ衰へた、致死期の師匠の不気味な姿は、殆ほとんども面おもてを背そむけずにはゐられなかつた程、烈しい嫌悪の情を彼に起させた。いや、単に烈しいと云つたのでは、まだ十分な表現ではない。それは恰あたかも目に見えない毒物のやうに、生理的な作用さへも及ぼして来る、最も堪へ難い種類の嫌悪であつた。彼はこの時、偶然な契機によつて、醜みにくき一切に対する反感を師匠の病びやう軀うくの上に洩もらしたのであらうか。或は又「生」の享樂家たる彼にとつて、そこに象徴された「死」の事実が、この上もなく呪ふ可みき自然の威嚇みかくだつたのであらうか。——兎に角、垂死すゐしの芭蕉の顔に、云ひやうのない不快を感じた其角は、殆ほとんど何の悲しみもなく、その紫がかつたう

すい唇に、一刷毛の水を塗るや否や、顔をしかめて引き下つた。尤もその引き下る時に、自責に似た一種の心もちが、刹那に彼の心をかすめもしたが、彼のさきに感じてゐた嫌悪の情は、さう云ふ道徳感に顧慮すべく、余り強烈だつたものらしい。

其角に次いで羽根楊子をとり上げたのは、さつき木節が相図をした時から、既に心の落着きを失つてゐたらしい去来である。日頃から恭謙の名を得てゐた彼は、一同に軽く会あしや積くをして、芭蕉の枕もとへすりよつたが、そこに横はつてゐた老俳諧師の病みほうけた顔を眺めると、或満足と悔恨との不思議に錯雑した心もちを、嫌でも味はなければならなかつた。しかもその満足と悔恨とは、まるで陰と日向のやうに、離れられない因縁いんねんを背負つて、実はこの四五日以前から、絶えず小さな彼の気分を搔かきみだ乱みだしてゐたのである。と云ふのは、師匠の重病だと云ふ知らせを聞くや否や、すぐに伏見から船に乗つて、深夜にもかまはず、この花屋の門を叩いて以来、彼は師匠の看病を一日も怠つたと云ふ事はない。その上之道しだうに頼みこんで手伝ひの周旋を引き受けさせるやら、住吉大明神へ人を立てて病氣本復を祈らせるやら、或は又花屋仁左衛門に相談して調度類の買入れをして貰ふやら、殆彼一人が車輪になつて、万事万端の世話を焼いた。それは勿論去来自身進んで事に当つたので、誰に恩を着せようと云ふ氣も、皆無だつた事は事実であるが、一身を挙げて師匠

の介抱に没頭したと云ふ自覚は、いきほひ勢、彼の心の底に大きな満足の種を蒔いた。それが唯、意識せられざる満足として、彼の活動の背景に暖い心もちをひろげてゐた中は、元より彼も行住坐臥に、何等のこだはりを感じなかつたらしい。さもなければ夜伽よとぎの行燈あんどうの光の下で、支考と浮世話に耽つてゐる際にも、ことさら故に孝道の義を釈といて、自分が師匠に仕へるのは親に仕へる心算つもりだなどと、長々しい述懐はしなかつたであらう。しかしその時、得意な彼は、人の悪い支考の顔に、ちらりと閃いた苦笑を見ると、急に今までの心の調和に狂ひの出来た事を意識した。さうしてその狂ひの原因は、始めて気のついた自分の満足と、その満足に対する自己批評とに存してゐる事を発見した。明日にもわからない大病の師匠を看護しながら、その容態をでも心配する事か、いたづら徒に自分の骨折ぶりを満足の眼で眺めてゐる。——これは確に、彼の如き正直者の身にとつて、自らやま疚やましい心もちだつたのに違ひない。それ以来去来は何をするのにも、この満足と悔恨との扞かんかく拮かくから、自然と或程度の掣せ肘いちゅうを感じ出した。將まさに支考の眼の中に、偶然でも微笑の顔が見える時は、反つてその満足の自覚なるものが、一層明白に意識されて、その結果愈いよいよ自分の卑しさを情なく思つた事も度々ある。それが何日か続いた今日、かうして師匠の枕もとで、末期の水を供する段になると、道徳的に潔癖な、しかも存外神経の繊弱な彼が、かう云ふ内心の矛盾の前に、全

然落着きを失つたのは、氣の毒ではあるが無理もない。だから去来は羽根楊子を取り上げると、妙に体中が固くなつて、その水を含んだ白い先も、芭蕉の唇を撫でながら、頻しきりにふるへてゐた位、異常な興奮に襲おそはれた。が、幸さいはいひ、それと共に、彼の睫毛まつげに溢れようとしてゐた、涙の珠もあつたので、彼を見てゐた門弟たちは、恐おそろあおそろの辛しんらつ辣な支考まで、全くこの興奮も彼の悲しみの結果だと解釈してゐた事であらう。

やがて去来が又憲法小紋の肩をそば立てて、おづおづ席に復すると、羽根楊子はその後にゐた丈艸の手へわたされた。日頃から老实な彼が、つましく伏眼になつて、何やらかすかに口の中で誦ずしながら、静に師匠の唇うらほを沾うるほしてゐる姿は、恐らく誰の見た眼にも厳おごそだつたのに相違ない。が、この厳な瞬間に突然座敷の片すみからは、不気味な笑ひ声が聞え出した。いや、少くともその時は、聞え出したと思はれたのである。それはまるで腹の底からこみ上げて来る哄こうせう笑わらが、喉のどと唇くちびるとに堰せかれながら、しかも猶なほ可か笑わらしさに堪へ兼ねて、ちぎれちぎれに鼻の孔から、迸ほとばしつて来るやうな声であつた。が、云ふまでもなく、誰もこの場合、笑を失したものがあつた訳ではない。声は実にさつきから、涙にくれてゐた正秀の抑へに抑へてゐた慟どうこく哭なきが、この時胸を裂いて溢れたのである。その慟どうこく哭なきは勿論、悲愴ひきさうを極めてゐたのに相違なかつた。或はそこにゐた門弟の中には、「塚も動けわが泣く声は

秋の風」と云ふ、師匠の名句を思ひ出したものも、少くはなかつた事であらう。が、その凄絶なる可き慟哭にも、同じく涙に咽ぼうとしてゐた乙州は、その中にある一種の誇張に対して、——と云ふのが穩でないならば、慟哭を抑制すべき意志力の欠乏に対して、多少不快を感じずにはゐられなかつた。唯、さう云ふ不快の性質は、どこまでも智的なものに過ぎなかつたのであらう。彼の頭が否と云つてゐるにも関らず、彼の心臓は忽ち正秀の哀慟の聲に動かされて、何時か眼の中は涙で一ぱいになつた。が、彼が正秀の慟哭を不快に思ひ、延いては彼自身の涙をも潔しとしない事は、さつきと少しも變りはない。しかも涙は益眼に溢れて来る——乙州は遂に両手を膝の上についた儘、思はず嗚咽の聲を發してしまつた。が、この時歔歔するらしいけはひを洩らしたのは、独り乙州ばかりではない。芭蕉の床の裾の方に控へてゐた、何人かの弟子の中から、それと殆同時に涙をすすする聲が、しめやかに冴えた座敷の空氣をふるはせて、断続しながら聞え始めた。

その惻々として悲しい声の中に、菩提樹の念珠を手頸にかけた丈艸は、元の如く静に席へ返つて、あとには其角や去来と向ひあつてゐる、支考が枕もとへ進みよつた。が、この皮肉屋を以て知られた東花坊には周囲の感情に誘ひこまれて、徒に涙を落すやうな繊弱な神経はなかつたらしい。彼は何時もの通り浅黒い顔に、何時もの通り人を莫迦にしたや

うな容子を浮べて、更に又何時もの通り妙に横風に構へながら、無造作に師匠の唇へ水を塗つた。しかし彼と雖もこの場合、勿論多少の感慨があつた事は争はれない。「野ざらしを心に風のしむ身かな」——師匠は四五日前に、「かねては草を敷き、土を枕にして死ぬ自分と思つたが、かう云ふ美しい蒲団の上で、往生の素懷を遂げる事が出来るのは、何よりも悦ばしい」と繰返して自分たちに、礼を云はれた事がある。が、実は枯野のただ中も、この花屋の裏座敷も、大した相違がある訳ではない。現にかうして口をしめしてゐる自分にしても、三四日前までは、師匠に辞世の句がないのを氣にかけてゐた。それから昨日は、師匠の発句を滅後に一集する計画を立ててゐた。最後に今日は、たつた今まで、刻々臨終に近づいて行く師匠を、どこかその経過に興味でもあるやうな、觀察的な眼で眺めてゐた。もう一步進めて皮肉に考へれば、事によるとその眺め方の背後には、他日自分の筆によつて書かるべき終焉しゆうえんき記の一節さへ、予想されてゐなかつたとは云へない。して見れば師匠の命終めいしゆうに侍しながら、自分の頭を支配してゐるものは、他門への名聞みやうもん、門弟たちの利害、或は又自分一身の興味打算——皆直接垂死の師匠とは、關係のない事ばかりである。だから師匠はやはり発句の中で、屢しばしば予想を違たくましくした通り、限りない人生の枯野の中で、野ざらしになつたと云つて差支へない。自分たち門弟は皆師匠の最後を悼いたまずに、師匠を

失つた自分たち自身を悼んでゐる。枯野に窮死した先達を歎かずに、薄暮に先達を失つた自分たち自身を歎いてゐる。が、それを道徳的に非難して見た所で、本来薄情に出来上つた自分たち人間をどうしよう。——かう云ふ厭世的な感慨に沈みながら、しかもそれに沈み得る事を得意にしてゐた支考は、師匠の唇をしめし終つて、羽根楊子を元の湯呑へ返すと、涙に咽むせんでゐる門弟たちを、嘲あざけるやうにじろりと見廻して、徐おもむろに又自分の席へ立ち戻つた。人の好い去来の如きは、始からその冷然とした態度に中あてられて、さつきはくがの不安を今更のやうに又新にしたが、独り其角が妙くすぐに擦つたい顔をしてゐたのは、どこまでも白はくが眼で押し通さうとする東花坊のこの性行上の習氣を、小うるさく感じてゐたらしい。

支考に続いて惟ひねんぼう然坊が、墨染こくもの法衣ころもの裾をもそりと畳へひきながら、小さく這ひ出した時分には、芭蕉の断末魔も既にもう、弾指だんしの間に迫つたのであらう。顔の色は前よりも更に血の氣を失つて、水に濡れた唇の間からも、時々忘れたやうに息が洩れなくなる。と思ふと又、思ひ出したやうにぎくりと喉が大きく動いて、力のない空氣が通ひ始める。しかもその喉の奥の方で、かすかに二三度痰たんが鳴つた。呼吸も次第に静になるらしい。その時羽根楊子の白い先を、將まじにその唇へ当てようとしてゐた惟然坊は、急に死別の悲しさとは縁のない、或る恐怖に襲はれ始めた。それは師匠の次に死ぬものは、この自分ではある

まいかと云ふ、殆無理由ほとんどに近い恐怖である。が、無理由であればあるだけに、一度ひとたびこの恐怖に襲はれ出すと、我慢にも抵抗のしやうがない。元來彼は死と云ふと、病的に驚悸きやうきする種類の人間で、昔からよく自分の死ぬ事を考へると、風流の行脚あんぎやをしてゐる時でも、総身に汗の流れるやうな不気味な恐しさを経験した。従つて又、自分以外の人間が、死んだと云ふ事を耳にすると、まあ自分が死ぬのではなくつてよかつたと、安心したやうな心もちになる。と同時に又、もし自分が死ぬのだつたらどうだらうと、反対の不安をも感じる事がある。これはやはり芭蕉の場合も例外には洩れないで、始はじめまだ彼の臨終がこれ程切迫してゐない中は、——障子に冬晴の日がさして、園女そのじよの贈つた水仙が、清らかな句を流すやうになると、一同師匠の枕もとに集つて、病間を慰める句作などをした時分は、さう云ふ明暗二通りの心もちの間を、その時次第で徘徊はいくわいしてゐた。が、次第にその終焉えんが近づいて来ると——忘れもしない初時雨はつしぐれの日に、自ら好んだ梨の実さへ、師匠の食べられない容子を見て、心配さうに木節が首を傾けた、あの頃から安心は追々不安にまきこまれて、最後にはその不安さへ、今度死ぬのは自分かも知れないと云ふ険悪な恐怖の影を、うすら寒く心の上にひろげるやうになつたのである。だから彼は枕もとへ坐つて、刻銘に師匠の唇をしめしてゐる間中、この恐怖に崇たたられて、殆末期ほとんどまつしの芭蕉の顔を正視

する事が出来なかつたらしい。いや、一度は正視したかとも思はれるが、丁度その時芭蕉の喉の中では、痰のつまる音がかすかに聞えたので、折角の彼の勇氣も、途中で挫折してしまつたのであらう。「師匠の次に死ぬものは、事によると自分かも知れない」——絶えずかう云ふ予感めいた声を、耳の底に聞いてゐた惟然坊は、小さな体をすくませながら、自分の席へ返つた後も、無愛想な顔を一層無愛想にして、なる可く誰の顔も見ないやうに、上眼ばかり使つてゐた。

続いて乙州、正秀、之道、木節と、病床を囲んでゐた門人たちは、順々に師匠の唇を濡した。が、その間に芭蕉の呼吸は、一息毎に細くなつて、数さへ次第に減じて行く。喉も、もう今では動かない。うす痘痕の浮んでゐる、どこか蠟のやうな小さい顔、遙な空間を見据ゑてゐる、光の褪せた瞳の色、さうして頤にのびてゐる、銀のやうな白い鬚——それが皆人情の冷さに凍てついて、やがて赴くべき寂光土を、ちつと夢みてゐるやうに思はれる。するとこの時、去來の後の席に、默然と頭を垂れてゐた丈艸は、あの老実な禪客の丈艸は、芭蕉の呼吸のかすかになるのに従つて、限らない悲しみと、さうして又限らない安らかな心もちとが、徐に心の中へ流れこんで来るのを感じ出した。悲しみは元より説明を費すまでもない。が、その安らかな心もちは、恰も明方の寒い光が次第に暗の中にひろがるやう

な、不思議に朗ほがらな心もちである。しかもそれは刻々に、あらゆる雑念を溺らし去つて、果ては涙そのものさへも、毫がうも心を刺す痛みのない、清らかな悲しみに化してしまふ。彼は師匠の魂が虚夢の生死を超越して、常じやうぢゆう住涅槃ねはんの宝土に還つたのを喜んででもゐるのであらうか。いや、これは彼自身にも、肯定の出来ない理由であつた。それならば——ああ、誰か徒いたづらにしそ 逡巡して、己を欺くあへの愚を敢てしよう。丈艸のこの安らかな心もちは、久しく芭蕉の人格的圧力の桎梏しつこくに、空しく屈してゐた彼の自由な精神が、その本来の力を以て、漸やうやく手足を伸ばさうとする、解放の喜びだつたのである。彼はこの恍くわう惚こつたる悲しい喜びの中に、菩提樹ぼだいじゆの念珠をつまぐりながら、周囲にすすりなく門弟たちも、眼底を払つて去つた如く、唇頭しんとうにかすかな笑あみを浮べて、恭うやうや々しく、臨終の芭蕉に礼拝した。

かうして、古今に倫りんを絶した俳諧の大宗匠、芭蕉庵松尾桃たうせい青は、「悲歎かぎりなき」門弟たちに囲まれた儘、溘かふぜん然として属しよく續くわうに就いたのである。

(大正七年九月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系」芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：:j:utyama

校正：かとうかおり

1998年6月1日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

枯野抄

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>